

# 住信為替ニュース

THE SUMITOMO TRUST & BANKING CO., LTD FX NEWS

第1620 2002年01月07日(月)

2002年に年が改まってホテルのフロントに問い合わせました。しかし、「ユーロ紙幣はまだ入手できない。交換が可能になるのは朝7時頃」とか言うので、頭に来てタクシーを拾ってホテルに一番近いシティバンクの支店に。早く欲しかったということもありますが、キャッシュ・ディスペンサーを通して東京の自分の口座から新ユーロ紙幣が引き出されるのを実感したかったということもある。「あの銀行なら世界中で対処は早いだろう...」と思ったからで、実際にその通りだった。

日本のシティバンクのカードを入れると、日本語を先頭に案内言語を選べる。最初日本語の案内を見たら引き出し通貨の所にユーロがない。マルクともう一つわけの分からない通貨があった。あとで分かったがあれがユーロで、日本語表示がうまくいっていませんただけだったのだが、その時は変な通貨が出てきても困るので、「英語表記の対処はうまく行っているかも」と英語の案内に行ったら、最初が「Mark」でその次に「Euro」があって、そこを進むと100ユーロから500ユーロまでの引き出しを選べた。

500ユーロを引き出すと、50ユーロ紙幣と20ユーロ紙幣で500ユーロ分が出てきた。全種類の紙幣を揃えたいと思ったのだが、他の金額をやってみても50マルク紙幣と20マルク紙幣の組み合わせでしか出てこない。まあそうだろう。一つのキャッシュ・ディスペンサーの中にありとあらゆる種類の紙幣を入れるわけにはいかない。まだマルク紙幣も吐き出すようにも出来ているのだから。

で、一つ実験をした。出てきたばかりのユーロ紙幣でタクシー代金を支払おうとした。そしたらドイツ人の運転手が初めてだったので20ユーロ紙幣をまじまじと見た後、「うー...」と言って、突然ドアを開けてトランクを開けに行った。「おかしいな、何も預けてないのに...」。彼がトランクから持ち出したのは電卓で、計算を始めた。そりゃまあそうだ。タクシーのメーターは依然としてマルク建てですから、計算が必要。

しかし、ものすごく時間がかかりそうだったので、「じゃ、そのユーロ返して...」と言って、マルク紙幣を出したらものすごく安心したように、おつりをよこした。彼の顔はほんとうにほっとしていた。

1月1日にホテルの近くの商店へ。うまく変換が行っているか見に行く。主要な商店は閉まっているが、開いている商店でわざとマルク紙幣を使って買い物をする。お

つりがユーロで帰ってくるかどうかを見るためだ。しかし、大部分の商店はマルクを支払うとマルクでおつりを、ユーロで支払って初めてユーロでおつりを返してくる。

ECB や各国政府が決めたルールでは、初日からマルクで支払いをした人にも、ユーロでおつりを出す手はずだった。しかし、おつりを出すときに計算をしているのは忙しい店では実際上無理。マルクはまだ1ユーロ = 1.9558マルクで1対2に近いが、フランなどは1ユーロ = 6.5595フランだから難しい。おつりでユーロ普及、交換促進を考えたのは、ECB、政府側の勝手な思いこみだったようだ。

1月2日。初の営業日になった。ドレスナーなどドイツの各銀行ATMの周りにはどこでも凄い人の列。おつりでユーロが普及しない分、ドイツ人は銀行に並んでユーロを、手に入れているようだ。実に我慢強く並んでいる。しかしベルリンにいくつかあるシティバンクの支店に行くと誰も人が並んでいない。がらがらなのだ。

私などユーロ紙幣が必要になるたびにシティバンクのATMから直接、ごく簡単にユーロ紙幣をゲットしていた。ドイツ人もそうすれば良いのと思うのだが、彼らはやはりドイツの銀行が好きなようだ。

### 《 surprisingly smooth 》

明けましておめでとうございます。年末年始をベルリンで過ごしたので、今回の号はその関連にします。上記したように、この目で確かめただけでも実際のユーロの導入にはいろいろと問題がありました。1月1日のホテルのフロントなど、お金をユーロに替えようとするとき「今日は大勢のお客様がユーロを必要としますので……」と金額の制限を設けようとした。最初からユーロ紙幣、硬貨はどこにでも潤沢にあったわけではない。

イタリアでは、昨年春に発足した中道右派のベルルスコーニ政権がユーロスタートの歓迎式典を行わない、閣僚の間からユーロと統合欧州に批判的な発言が相次いでいることなどから、強い推進派だったルジェロ外相が辞任して、ユーロを巡る政治対立が依然として加盟国の中に残っていることを示した。

しかし小さな、そして慣れが解決してくれるような問題は沢山あったが、イタリアを含めてユーロ導入は12カ国で概ね順調に行ったと言える。この週末にはユーロ導入に関わるニュースが少なかったが、それは変換が大きな問題なく進んでいることの証拠でもある。「驚くべき成功」と表現した新聞もあった。

なにせ3億人の通貨入れ替え作業だったのだから、多少の問題が生ずるのは当然だったが、大きな視点から言えばそれもなかった。ユーロ導入がうまくいくかどうか息を潜めて見ていた一番手はイギリスだっただろう。もともと推進派と見られるブレア首相は導入成功を見て

「ユーロはもはや現実だ。その存在を軽んじ続けるのはとてもバカげたことだ」

と述べ、将来の英国へのユーロ導入に強い意欲を示した。

今回導入を見送ったイギリス、それにデンマーク、スエーデンばかりでなく、スイスなどの国でもユーロは時間を置かずにこれら各国の商店やホテルに受け入れられる「平行通貨」(parallel currency)になると見られている。各国国民が国境をあまり意識せず移動する欧州では、3億人が使う通貨にこれら諸国の商店、ホテルが冷淡な態度を取り、消費者、旅行者にその都度為替変換を求めるのは實際上無理だ。

イギリスやスイスでの調査では、各店舗やホテルはユーロでの支払いを受け入れるとしている。ということは、実際にはイギリス、デンマーク、スエーデンそれにスイスなどでも「ユーロの導入」は準法貨として導入が進むということである。あとは、法貨としての地位をどちらに与えるか、自国通貨を放棄するかどうかの問題に収斂する。

正月の欧州で一番聞き、そしてこちらの心に響いた言葉は、「We are Europeans」(我々はヨーロッパ人)というものだ。これに now を付けて「We are now Europeans」というパターンもある。ヨーロッパの連中は皆、少しシャイな、照れた表情を見せながらこの言葉を発する。彼らも揺れているのだ。ドイツ人、フランス人である以上にヨーロッパ人と言っていいものか、流れに乗せられた発言をしてもいいものか、と。

それはそうだろう。ユーロ導入を決めた各国にしても、賛成論が圧倒的だったわけではない。イタリアの例を見るまでもないが、国内には根強い反対論があったし、今でもユーロ導入に批判的な勢力はいる筈だ。欧州の連中は、一つの流れが永遠に続くことなどないことを知っている。だから、「We are Europeans」と期待を込めて言いながら、本当にそうしてくれるか疑念がある。

しかし欧州はこれまでも着実に歩を進めてきた。まず、域内のビザ、パスポートをなくした。旅行が自由に出来る環境を作ったのだ。次に同一規格、または相互乗り入れ可能なシステムを採用することによって、スペインで買った携帯電話でも北欧で使える様にした。これは重要な事だ。今の日本では、日本の携帯電話を持っていても韓国、中国、台湾でさえ通じない。やっと海外で使える携帯電話の宣伝が始まった段階なのだ。

そして、誰も言わないが欧大陸で共通に使われる言葉として英語が急速に共通語化しつつある。筆者にとって欧大陸に行くことに恐怖がないのは、英語がどこでも通じるからだ。実際の所、ドイツではタクシーの運転手もかなりの程度英語を解する。コミュニケーションできるのだ。だからこうして数えても、既に欧州は三つの大きな事(ビザなし、通信と言語の共通化)を為し遂げてきた。今の日本が周辺諸国との間で、何一つもっていないものだ。

そして今回の通貨の統一である。欧州の連中が誇らしげになる気持ちは分かる。世界のどの地域でも出来ないことをやっている、という軽い興奮を感じるのは無理もない。

ユーロに賛成していた連中も、反対していた連中も新しいお札を見て軽い興奮を覚えるのは当然だろう。私でもそうだったのだから。

### 《 still something that need to be done 》

この軽い興奮は、年明けの外国為替市場にも伝搬した。ユーロは対ドルでも対円でも大幅に上昇したのである。対円では120円に接近した。ユーロ導入時(notional な)を思い起こさせてくれた。

実際の所、単一通貨の導入により欧州経済には新しい息吹が吹き込まれる。経済には「efficient」「flexible」「stable」の三要素が加わるだろう。欧州各国を訪問したときにその都度生じていた通貨交換の煩わしさがなくなり、コンピューター・システムも大幅に効率化されるだろう。各国経済は、従来以上によりより大きな柔軟性を要求されるようになるはずだ。そして、物価などにも安定化、平準化の圧力がかかる筈である。

しかし、残った問題は多い。単一通貨の導入が良いことづくめだったら、導入時の1ユーロ=1.17ドル、138円からなぜユーロが大幅に落ちたのか、そして今でも世界の外貨準備の68%がドルで、ユーロがなぜ13%にとどまっているのかを理解できない。

それは、雇用条件、税制など欧州各国で依然として違う上に、それを例えばアメリカ、日本、それに成長著しいアジアなどと比べると競争力という点で劣っているものが多いからだ。共通通貨導入は、欧州の投資環境の一步前進に過ぎない。例えば企業がそこへの投資を決める要因は、通貨だけではない。労働者を雇ったらなかなか解雇出来ないシステムの国では、雇用に慎重になる。ドイツでは一度雇った労働者は、よほどのことがない限り首には出来ない。

また労働者一人を雇うためにかかる費用の問題もある。つまり雇用に関わる企業負担問題だ。欧州では労働者一人に支払う賃金の二倍が必要だと言われる。しかし、アメリカでは1.5を切ると言われる。欧州は同じ資本主義でも、アメリカに比べれば雇用条件だけでなくいろいろな面で硬直性を残す。企業は3億人の単一通貨圏に魅力を感じても、こうした条件をクリアしなければ実際の資金は動かせない。

だから「ユーロ導入即欧州経済のビッグバン」とはならないだろう。成長率格差の問題もある。為替レートは「美人競争」「不美人競争」で決まるから、欧州に多少の魅力が出てきても、他の諸国がそれに勝る魅力を持っているならば、相場にはその通りに現れる。例えば成長率を見ると、回復に向かうアメリカ経済の方が強いとの見方が大勢だ。過去10年の成長力を見れば明らかにアメリカの方が高かったし、今後もそうだと考える人はドルを買う。

そして最後は政治だ。ドルとユーロが一番違うのは、前者が強い政治的ユニティーを持っているということだ。それは、行き過ぎかもしれないが同時多発テロに対してアメ

リカ国民がブッシュ大統領の下に団結して見せたことで顕著に示された。あの団結が欧州にあるか。今でもイタリアにはユーロ誕生に関して式典さえ拒んでいる政権がある。ユーロは依然として政治的存在としては弱い。

そうした点を勘案するならば、ユーロは対ドルではそれほど値上がりできないのではないかと予想することが出来る。しかし今年のユーロは対円では既に予想したとおりかなり上昇するだろう。デフレスパイラルに入る以前に「悲観論のスパイラル」に入っている日本の円に比べれば、ユーロの方に歩があると思えるからである。

今週の主な予定は以下の通り。

1月7日(月)	B I S 総会会議
1月8日(日)	米 11 月製造業受注 11 月景気動向指数(速報) 11 月全世帯家計調査 小泉総理東南アジア 5 カ国歴訪(15 日まで)
1月10日(木)	米 11 月卸売り在庫
1月11日(金)	12 月マネーサプライ 12 月卸売物価指数 米 12 月卸売物価

### 《 have a nice week 》

年末年始はいかがお過ごしだったでしょうか。実に 20 年ぶりに海外で正月を過ごしましたが、ドイツの正月は日本とは全く異なると思いました。彼らにとっては当然ながらクリスマスの方が重要な儀式なんです。静かで、秩序立っている。正月はただただ去る年を忘れ、新しい年を祝う瞬間、一日なんですな。

爆竹、花火、そしてシャンペン。2002 年午前零時にブランデンブルク門を埋めた群衆は、この三つに酔っていました。私はビデオを回していたので、完全に乗れたとは言えない。カメラの窓に酔ったドイツ人が顔を突きだしてくるのには閉口しました。

乱痴気騒ぎのドイツ人を見ながら、「We are Europeans」と言える彼らが羨ましいな、と少し思いました。経済政策に「夢」がない日本の国民の一人として。経済を立て直さねばならないのは確か。しかし、for what が今の日本にはない。日本人が少しはにかみながら「We are Asians」と言えるのは一体いつだろう、なんて考えました。

欧州に渡った理由はユーロ導入を見ること以外にもう一つあって、それは 1990 年にベルリンの壁が崩壊した直後に行った東ドイツがどうなったかでした。ベルリンに行く際には知り合いのツテを頼らずに自分のホームページ (<http://www.ycaster.com/>) を通じて私に付き合ってくれるボランティアを募集したのですが、ベルリンのソニーに

お勤めの杉岡さん（私のサイトの熱心な読者だそうです）が申し出られて、殆ど彼と行動をともしました。

行ったのはシュベリーン。90年にハンブルクから入って、そのあまりの落差（ハンブルクとの）に驚いた旧東ドイツの街です。それがどうなっているが私の興味の対象だった。杉岡さんの車に乗せてもらって朝から。ベルリンからの行き帰りで500キロ以上あった（途中ポツダムなどにも寄りましたが）。

12年前のシュベリーンはまるで中世の絵本から抜け出たような印象の街でした。それは、今でも私の心象に非常に強く残っている。とても20世紀の街には思えなかった。人は貧弱で、商店には何も無い。「西ドイツのテレビを見ていたが、あれは全部嘘だと思っていた」と言うバーテン。

この街を歩いていて、「社会主義とは人間を不幸にするシステムだ」と強く思ったのを今でも鮮明に覚えています。あまりにも、直ぐ近くの西の街と違いすぎる。人間の体格もです。ぼろぼろになった石畳の道、朽ち果てそうになっている古城、そしておもちゃのようなトラバント（旧東ドイツ製の小型車）。私たちが乗っていったベンツとの差は明確でした。湖と本来は風光明媚であっただろうが、しかし劣化が著しいという点で驚くような街だった。

しかし、今回行ったら全く変わっていました。相当な復興資金が入っているのでしょう。古城（シュベリーン・シュロス）は完全に作り直されて観光名所になっているようで、ライブチヒからの団体旅行の一員として来ていたドイツ人のオジさんと何度か言葉を交わしました（お互いの下手な英語で）が、彼以外にも大勢の人が詰めかけていた。湖には観光船も浮かんでいた。まるで、カナダのケベックのような街に化けていた。ケベックにも城のようなホテルがある。

商店街にはモノが溢れていました。デパートが進出し、シティバンクの支店まで出来ていた。湖があり、城がありで、この街はこれから発展するかもしれないと思いました。城が一番高い建物で、街の風情がいいのです。しかし、「a wall in the head」と言われた心の壁がこの地方の人から消えたかどうかまでは分かりませんでした。町並みは確かに西側並みになった。しかし、自分たちが信じてきたものが崩れた後遺症はあるような印象がしました。

また10年くらいしたら訪れたい場所です。

A Happy New Year To You All !!

*《当「ニュース」は、住信基礎研究所主席研究員の伊藤（03-5410-7657 E-mail ycaster@gol.com）が作成したものです。許可なき複製、転送、引用はご遠慮下さい。また内容は表記日時に作成された当面の分析・見通しで一つの見方を示したものであり、売買を推奨するものではありません。最終的な判断は、御自身で下されますようお願い申し上げます。》*

ます》